

ラサにおける民族内格差と

チベット人アイデンティティの行方

村上大輔

はじめに

二〇〇八年春、世界を駆け巡ったラサ「三・一四」事件。チベット仏教ゲルグ派大僧院デブン寺とセラ寺、双方合わせて約一千人規模のチベット人僧侶による抗議行動は、多くの大衆によって暴動にまで発展した^①。漢民族を襲い、彼らの商店が破壊・略奪され、その後、当局によって武力鎮圧されたこの「事件」は、四川省や青海省などのチベット族居住地域にまで波及した。それにもない、欧米・日本ではチベットに対する関心や同情が広がったものの、数百万のチベット人の住む中国国内では、「造反した、恩知らずのチベット」に対する警戒感・憎悪感が増幅した。こ

れを受け、政治・宗教活動に対する当局の規制が、近い将来さらに厳しくなると予想される。この事件は、現地の漢民族はもちろん、当事者たちはあまりにも多くのものを失い、実に悲劇的なものであった^②。

本稿はこの事件を扱うものではない。しかしながら、事件の遠因とでも言うべき、急速な経済発展の中で広がり続けるラサにおける「格差」について、少しく言及・分析する。欧米や日本の多くのメディアでは、漢・チベット両民族間の歪みや矛盾のみを強調するが、本論考では、普段あまり省みられることのないチベット民族内の社会的・経済的格差や、チベット人の仏教信仰の微妙な変化について注目してみたい。こういった民族内に存在する矛盾や葛藤に注目することにより、別の角度から「三・一四」事件への

理解を深めることができれば、という筆者の願いもある。

中国政府に対する不信感が根強く存在するチベット地域であるが、あの暴動の本質を、歴史学を含んだ政治学的な言説のみで語りつくすことはできない、というのが筆者の立場である。はたして政治的・宗教的な要求だけであったのか、官製とはいえあの破壊・略奪映像を見る限り、すつきりしないものが残る。明白な独立要求をラサ中心部で展開し、政治的抑圧の象徴である公安などを明確なターゲットとしていた、一九八九年のラサ暴動の時とは違い、今回はレストラン、小売店や宝石店など、漢民族の経済活動の具体的拠点を無差別に襲ったものであった。

以下ではまず、ラサの経済発展について概観しながら、中国・チベットにおける教育・経済格差の現状を、統計データをもとに分析したい。そして次に、ラサの富裕層形成について言及し、チベット民族内の格差について述べる。その後、チベット人のアイデンティティの根幹でもある仏教信仰の微妙な変化、「さらに豊かに」を願って現世利益を希求するカルト的信仰の流行を追ってみたい。以上の点を提示することにより、現地の視点からより複眼的に、ラサの格差の問題について垣間見ることができればと思う。

一 概 観

ラサの経済発展において大きな転換点のひとつは、八年前の二〇〇〇年前後であったと思われる。八〇年代末以降、立て続けに発生していたチベット人の独立要求デモの鎮圧・防止のため、九〇年代まで、自治区政府は経済発展よりも政治的安定に力を注いでいた。その一方で、「安定と経済発展は表裏一体」、「さらなるチベットの繁栄のため」という大義名分の下、納税や資金融資で優遇を受けた漢民族企業家や労働者がラサを中心に流入し始めたのも、九〇年代（特に一九九四年前後から）であった。その後、ラサではこれら外部からの資金や労働力により西郊外の商業地域が拡大し始めていたが、目に見えて街の景観が変わり、農村―都市間の格差が大きくなり、経済発展に拍車がかかったのは九〇年代末になってからである。

この動きを後押しするかのように、二〇〇〇年に中央政府は「西部大開発」を発表する。交通インフラの整備、工場誘致、観光開発、資源開発などに対して、九〇年代からあった中央や他省からの補助金はさらに巨大になった。それにともない、自治区のGDPの増長速度は中国全体のGNPのそれに比べて大きくなり、二〇〇〇年以降、七年連続して一二%を超えている（二〇〇七年は一四%）。

なかでも、二〇〇〇年前後以降、目覚しく発展してきた産業は観光業である。中国内地では、沿岸部を中心に「エキゾチックな」チベット仏教に対する関心が九〇年代後半以降高まっていたが、他方、政府レベルでは観光業育成のためさまざまな象徴的な出来事があり、具体策が決定された。例えば、二〇〇〇年には一大仏教聖地であるラサの大昭寺が世界遺産に登録され、それにもない国家旅游局より、「中国優秀旅行都市」の称号がラサに与えられた。また翌年にはラサ—空港間などのインフラ整備計画が大々的に発表され、最も注目されたのが青藏鉄道建設であった。こういったインフラの充実や内地漢民族のチベットに対する関心・憧憬に追い風を受けて、一九九五年では一四万人弱であった自治区入境の中国人観光客数は、二〇〇〇年から毎年三〇%前後の成長率を記録し、二〇〇五年には約一七〇万人となった。二〇〇六年七月には青藏鉄道が開通し、翌二〇〇七年にはチベット自治区総人口の二八〇万をはるかに凌ぐ三六〇万人を記録した。同年の外国人観光客は約三七万人（うち二〇%以上は日本人で外国人最多）となり、観光業の総収入は五〇億元に迫る勢いである。これはチベット自治区のGDPの約一四%を構成し、間接・直接にこの恩恵を受けているラサ人口は、少なくとも三万人はいると言われている。

このように、観光業を牽引力として多数の人間が流入

し、急速に経済発展するラサであるが、ここ数年インフレや物価の上昇が甚だしく一般のチベット人の家計を圧迫し始めている。例えば、チベット人の主食であるヤク肉についてみると、青藏鉄道建設が決定された七年前は五百グラム当たり八元ほどであったが、今（二〇〇八年夏）では二五元ほどで売られている。また他にも、チベット人の食生活には欠かせないヤクバターやハダカ麦（大麦の一種）なども、数倍以上に値段が跳ね上がった。こうした物価上昇にともない、公務員の給料は引き上げられたものの、中小零細企業や商店で働く人々の収入は伸びに限りがあるため、生活が苦しくなってきた。青藏鉄道が開通すれば経済的に豊かになる、モノが大量に内地から流入するので物価は安くなる、と以前は宣伝されていたが、地元漢民族を含めた経済的下層に位置する人々の実体験では全く逆の現象が起きており、不満や戸惑いが広がっている。『拉薩晩報』など地元の公共新聞でさえ、当局の対応の遅さを批判し、抜本的な対策を講ずるよう促す論調がここ二年ほど目立ってきている。

ここで、急速な経済発展にともない広がる格差の現状について、統計データをもとに見ておく。まず図1であるが、チベット自治区の農牧民一人当たりの純収入と非農牧民（都市部を中心に居住する労働者・職員）の賃金の推移を表している。一九八〇年代は収入の伸びは両者とも緩や

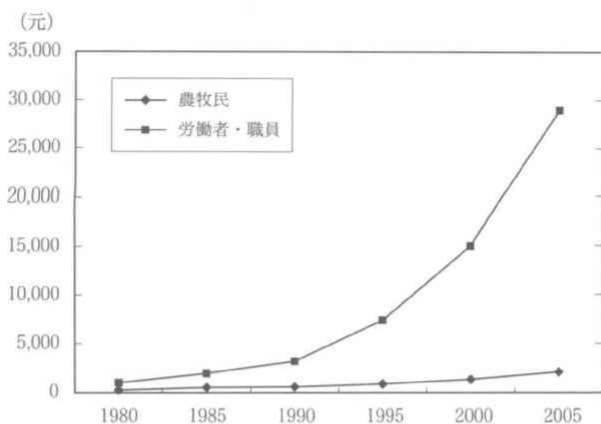


図1 チベット自治区、農牧民1人当たりの純収入と非農牧民（労働者・職員）の賃金の推移

出所：『西藏統計年鑑2007』20頁より作成。

かであったが、九〇年代に入って労働者・職員の賃金だけが加速しはじめ、二〇〇五年には年収三万元ほどに到達している。チベット自治区内では農牧業を糧に生活している人口が全体の八五%前後であることを考慮すると、「チベットの経済発展」により多大な恩恵を受けているのは少数派ということになる。しかしここで付記しておきたいことは、ここ一〇年ほど農牧民出身のチベット人がラサを中心都市部へ職を求めて大量に流入している事実である。漢民族の流入はよく指摘されるが、チベット族も経済的豊かさを求めてラサに流れ込んでいる。

次に、チベットと中国の他地域における所得格差を比べてみる（表1）。中国全体の（都市―農村）の所得格差は世界標準から見るとかなり大きい（約五・八倍）、チベット自治区はそれをも凌駕する約一二倍となっている。青海省や新疆ウイグル自治区など西部の他地域でも所得格差は全国平均を大きく上回っているものの、チベットの比ではない。この所得差を家計という観点から、もう少し公平に見てみよう。表1のBは「農村部居住民一人当たりの平均純収入」を表しており、幼少の子供や老人も農村の労働人口として計算していると思われる。チベットの農村部を四大家族として計算しても一戸当たりの年収は約一万元となり、都市部労働者一人当たりの収入の三分の一ほどであり、都市部では夫婦共働きが大多数であることを考慮する

表1 地域別〈農村部—都市部〉の所得格差
(2006年)

	(単位:元)		
	都市部A	農村部B	A/B
全国平均	20,856	3,587.04	5.81
チベット自治区	29,119	2,434.96	11.96
北京	39,684	8,275.47	4.80
上海	37,585	9,138.65	4.11
広東	26,400	5,079.78	5.20
四川	17,612	3,002.38	5.87
青海	21,981	2,358.37	9.32
新疆ウイグル自治区	17,704	2,737.28	6.47

凡例: A: 労働者・職員の平均収入 (国家機関、株式会社、その他私営零細企業など、都市部を中心に働く非農牧民)

B: 農村部居住民1人当たりの平均純収入

出所: 『中国統計年鑑 2007』153頁、369頁より作成。

表2 15歳以上の各地区人口のうち
文盲の占める割合 (2006年)

	(単位: %)
全国平均	9.31
チベット自治区	45.65
北京	4.47
上海	4.92
広東	5.11
四川	12.56
青海	19.30
甘肅	22.27
新疆ウイグル自治区	6.66

出所: 『中国統計年鑑 2007』120頁より作成。

を、次に、グラフ(図2)を見てもらいたい。まず目に付くのは、チベット自治区では、小学校卒業レベルおよびそれ未満、両者合わせて人口の八割を超えている点である。

と、家計の格差もかなりあると言わざるを得ない。また、もうひとつ重要な事実を指摘すると、チベット自治区における農牧民の一人当たりの純収入は全省・全直轄都市の中でも最下位グループ(下から六番目)である一方、ラサなどの都市部の所得は、北京、上海に次いで全国で三番目であることである。こういった圧倒的な格差の中では、農牧民、特に都市に流れてきたものの職が見つからず、収入の安定しない層にとってみれば、経済的な疎外感を感じざるを得ない。

ラサにおける格差を見ていく上でもうひとつ考慮に入れるべき点は、チベット自治区、とりわけ農牧民地域における教育水準の低さである。教育レベルや職業訓練の差は、都会での雇用に大きく影響する。特に読み書きを含めて中国語にある程度堪能であることが必須となってきた。ここで表2を見てほしい。これは一五歳以上の各地区人口のうち、文盲の占める割合である。チベット自治区の文盲率四五・六五%というのは、全国平均に比べても異様に高く、次に文盲率の高い甘肅省(二二・二七%)の約二倍である。都市部では教育環境もよく、就学率が高いと思われるが、農牧地域では子供を労働力として使う場合が多く、上の文盲率はさらに上がると考えられる。

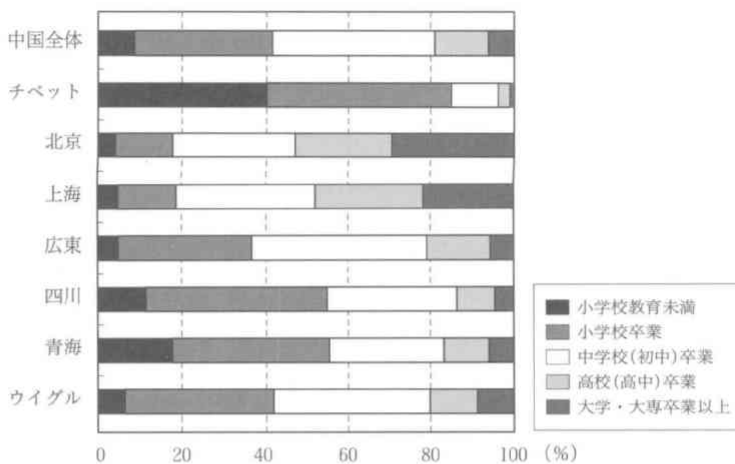


図2 6歳以上の各地区人口のうち、教育レベルの程度 (2006年)

出所：『中国統計年鑑2007』118-119頁より作成。

都市部で働くために最低限度必要だと言われている中学校(初中)卒業以上の教育レベルを保持しているのは、全体の約一五%に過ぎない。中学校卒業以上の占める割合は、全国平均では約六割、チベットへ出稼ぎにいく漢民族が最も多い四川省においても、約五割である。もちろん、教育をほとんど受けていない人間がビジネスで成功することもあるが、逆に教育を受けていても雇用に恵まれないこともあり、両者はほぼ相殺されると考えられる。図2が間接的に明示している点は、チベット人の多くが都市部で職を得るための質的訓練ができていないことである。内地でのより高い教育のおかげで技術力や知識を持った流入漢民族・回族に対して、教育レベルで劣る農牧民出身のチベット人は、都市部の労働市場において劣勢を余儀なくされている。

自らチベット仏教徒でもある経済学者フィッシャー(ロンドン大学)は、上記に提示したような問題を開発学の視点から分析し、地元の労働力を利用せずに出稼ぎ流入労働者に頼るような現在の構造は、経済的に非効率であることを示した^{⑧)}。地元住民に不公平感、疎外感を与えるだけでなく、中央からの莫大な補助金で現在の成長を支え続けるのは、中国経済全体にとって大きな損失であると説く。農牧民出身のチベット人が都市部の第二次、第三次産業にも組み込まれるよう、農村部の教育を充実させるのが最重要

で、これは結果的に地元民にとつても中央政府にとつても利がある、とするフィッシャーの提案は傾聴に値する。

以上概観してきたが、強調しておきたいことは、ラサにおける経済格差を単純に漢民族とチベット族の民族差と同一視してはならない点である。後述するように、ラサなどチベットの都市空間では「チベット人富裕層」が拡大しつつあり、単純労働に従事する過半数の流入漢民族などに比べて、経済的にも文化的にもかなり高い水準の生活を享受している。むしろ問題にすべきは、「現代化」から疎外され、教育水準の極めて低い農牧民出身者たちが、教育を受けた競争力の高い内地からの流入漢民族と、都市の労働市場で競争せざるを得ない理不尽な現実である。同じチベット族でありながら、高い教育を受けている都市部の富裕層と比べると境遇は雲泥の差である。ラサにおける格差は民族間格差の様相を呈しながらも、実のところは（都市―農村）の格差、教育の格差、そしてそれに伴う雇用機会の格差である点を考慮しなければ、全体像は見えてこない。

二 富裕層の形成

——「西藏班」（チベット学級）制度——

この節では、ここ一〇年ほどラサで台頭してきている「チベット人富裕層」について見ておきたい。これら富裕

層には旧貴族出身者が少なくないが、ここでは彼らを含めてチベットの改革開放政策以来、社会的・制度的に創られてきた富裕層を見ていく。「西藏班」（チベット学級）がその富裕層形成とその強化に決定的な影響を与えている。

「西藏班」とは何か。これは、小学校卒業生のうち、学業の優秀な者を中国内地の中等教育機関へ「留学」させる教育制度である。文革の影響もあり経済的に貧窮していたチベット社会を再生させるため、一九八四年、中央政府によってこの「選抜・輸送」教育は始められた。少数民族優遇政策の一環とされ、原則的に授業料や寮費、交通費などは中央政府や自治区政府、受け入れ省が負担することになつている。「より洗練された」、「より文明的な」教育を享受させるため、これまで約三万五千人の子供たちが送られ、職業訓練や高等教育を受けた人材約一万五千人がチベットへ戻つてきている。「西藏班」建設・継続のためこれまで約七億元が費やされ、現在二一の省や直轄都市の初中（中学校）・高中（高校）・中専（中等職業訓練学校）に西藏班養成施設が建設されている。「内地留学」は一九八四年以前（古くは「西藏解放」直後の一九五〇年代）にもあったが、自治区の広範な地域から農牧民の子息を含めて「公平」かつ「大規模」（毎年約一五〇〇人）に選抜し、内地に輸送する「西藏班」は画期的な試みだったといえる。故郷から遠く離れて内地で勉強する「西藏班」の子供た

ち。彼らは、まず一年間徹底的に中国語の読み書きを鍛えられる。その後三年間の中学生活の間、同じ学校で勉強する漢民族の子供たちと同様、数学や歴史、政治などを、漢民族教師によって中国語で書かれた教科書を用いて学習する。卒業後、ほとんどの生徒は高校や（ITや外国語、観光業をはじめとするサービス業などの）職業訓練学校へ進学するが、学校を卒業するまでチベットに帰省してはならない規則となっている。クラスメートの多くは同じチベット人であるし、親族などが生徒の寮を訪ねることはできないが、多感な年頃に七年間ものあいだ故郷を離れて、勉強に励まなければならぬ生徒たちの精神的プレッシャーは、相当なものであると察せられる。高校卒業後、多くの若者はチベットに戻り職に就くか、ラサの西藏大学などへ進学する。また、内地の大学へ進み学位を得た後に故郷に帰る者も少なくない。

これら「内地留学」を終えたチベット人は、概して漢民族並みに中国語が堪能で、英語などの外国語にもある程度精通し、専門知識を携えている。親族は無論のこと、地元政府や企業からも将来を大きく期待されており、本人たちも自分たちの特殊性やエリート性を意識している場合が多い。また、言葉遣いや服の着こなし方、態度や考え方などまでが洗練されていることが多く、若者特有の自信にも溢れ、一昔前の日本で喩えるところの「帰国子女」のような

印象を与える。同世代の若いチベット人は、内地経験をしてきたこれらの若者を、羨望の眼差しで見ることが多い。その一方、最も吸収力のある時期にチベット文化環境から離れていたため、母語であるチベット語の運用能力に極端に欠けてしまっている場合が多い。特に読み書きの能力が著しく損なわれており、チベット語で手紙を書くことはもちろん、チベット語の小説や新聞さえ読めなくなってしまうている。また、彼らは日常会話でさえ、中国語の単語を使わなければ意思の疎通が困難になっている。もともと、この傾向は都市部に住むチベット人の多くに当てはまることであるが、「内地帰り」の若者にはその傾向が一層強い。

複数の言語を同時に使って話す人間やその話しぶりを揶揄して、チベット語で「ラマルク」(Lamarck)という。「ヤギでも羊でも、どちらでもない」といった意味であるが、「ヤギの鳴き声か羊のそれか」分からないくらい、異なる体系に属する言語の奇妙な組み合わせで、言葉にならない言葉を話す人間を指す。西班牙出身者は間違いなく代表的な「ラマルク」である。また一方、「ギヤマポ」(Gyamapo)という言葉があるが、これはチベット族と漢民族のハーフを指す。数十年前まで、この「ラマルク」言語を話すチベット人は、一九五〇年代の人民解放軍の進駐以降増えていった「ギヤマポ」などに限られていた。しかし現

在では、西藏班出身者や地元大学の卒業生など、子供から若者、中年までラマルク言語を話す世代は広がっており、彼らはいわば社会言語学的には「ギャマポ」だと言えなくもない。

こうした言語や教育のレベルにおいて、チベット人の「漢化」が進んでいるとよく指摘される。とりわけ、西藏班などの「内地留学」の経験者たちに対して、その見方がされる。例えば、チベット政策アナリストのラフイットは、西藏班プログラムは漢民族同化政策以外のなにものもなく、チベット人にとって「現代性」(modernity)とは、人格的統合を犠牲にしてにしか享受できるものではない、と糾弾し[Lafitte 2003]、アメリカ在住の中国人教育学者ワンとチョウは、転地教育である西藏班は、チベット人の誇りとアイデンティティの育成を妨げるものと批判する[Wang and Zhou 2003]。また、その客観性に定評の高かった英国のチベット関連独立情報機関TINN (Tibet Information Network) ⁽¹⁵⁾でさえ、西藏班制度の目的は「漢化」で、「子供たちは自分たちの文化に本質的に無知となり、自分たちの民族性や民族の利益などに対して感覚を全く失ってしまった」と非常に否定的である。これらの批判において、中国語や漢民族の習慣に親しみ、チベットのそれに疎くなるという意味での「漢化」はまさにその通りと言わざるを得ない。しかしながら、これらのコメント

は現場を知らない外部からの偏見という印象を拭いえない。筆者が今まで交流のあった西藏班出身者の多くは、まさにその内地体験がゆえに、失われつつある自分たちのアイデンティティや民族性に対して非常に敏感になっている。

一〇代の多感な時期に、民族的な優越感に満ちた漢民族の学徒に囲まれながら、自分とは誰か、自分のチベットらしさとは何か、強く意識するような内的体験があると語る者が多いが、このような体験があるであろうことは想像に難くない。また、中国内地に長期滞在するというのは国内にいながらの一種の異文化体験とでも言うべきものであり、自分たちの文化や伝統に対して劣等感や葛藤を感じながらも、それらに自負を抱き、失うまいとする態度や心構えのようなものが熟成されていく。また、チベット帰郷後、自分たちは「昔の自分には戻れない」と、地元チベット人との精神的距離を半ば感じつつ、半ば戦術的に(パフォーマティブな社会的語彙や行為をもって)現代性と折り合いをつけながら「チベット人らしさ」を取り戻していく⁽¹⁶⁾。もちろん、西藏班出身者の経験や考え方は多様であるが、上記のような側面が顕著に見いだされることを指摘しておく。

帰郷後の西藏班経験者の社会的境遇についてであるが、内地で質の高い職業訓練、高等教育を受けたため、その経済的安泰や社会的地位がほぼ約束されている。自治区政府

の官僚、高等教育の教員、そして観光業の従業員など、チベット人富裕層の中核を形成するようになるのである。西藏時代のクラスメート同士は、社会的に上昇する中でもその連帯は保たれ、互いの友人や親族の就職に便宜をはかるのが常となつてゐる。また、西藏班出身者同士、もしくは地元の良い優秀な人材を輩出する西藏大学卒業生などを配偶者とする場合が少なくない。内地留学経験者や西藏大学卒業生だけでなく、同居する彼(女)らの父母や子など親族を含めると、拉萨などの都市空間においては富裕層に属するチベット人はかなりの割合で存在すると考えられる。正確な全体像を把握するのは難しいが、相当数、おそらくは拉萨在住のチベット人人口の数十パーセントにあたるであろうと推測される。前節でみたように、彼らのうち働く者の多くが農牧民の数倍〜十倍以上の年収を得ている。ここ一〇年ほど、彼らを経済的豊かさの具現的象徴として、「西藏班熱」はやや過熱気味で、拉萨の小学生の学習塾ブームも高まってきている。西藏班は上に触れたような問題を孕みつつも、豊かさを希求するチベット人、そして、更なる経済発展を成し遂げようとする自治区政府によって、これからも存続すると思われ。

三 現世利益信仰の流行

——女神タブチラモへのカルト的信仰——

ここ五年ほど拉萨で急速に浸透しつつある、現世利益信仰について少し見ておきたい。本来、現世利益の追求は仏教の理想とは程遠いものである。多くのチベット人にとってアイデンティティの根幹でもある仏教信仰において、顕著な形でこのような傾向が最近強まっていることは、拉萨における市場経済の突発的導入、それとともに拡大してきた経済格差と無縁であるとは思えない。ここでは、チベット人の間でカルト的に人気を集める女神タブチラモ (bzhi lha mo) への信仰について紹介する。

筆者が拉萨の西藏大学で教鞭をとっていた二〇〇〇年ごろには、タブチラモの知名度はかなり低かった。それが、二〇〇三、四年ごろから経済的な豊かさを求める地元人による利益が広く知られるようになり、今ではタブチラモの写真が茶館やレストラン、市バスの中など街のあちこちに見られるようになった。それも、最も崇拜されているラサ大昭寺の釈迦像の写真と同じ高さで祀られることが多い。タブチラモの本尊が安置されているラサ北郊外のタブチ僧院には、ダライ・ラマ一四世の誕生曜日とされる水曜日に、多くの巡礼者が供物である酒を片手に訪れる。如来や

菩薩などの尊格とは違い、護法神 (srung ma) でもあり現世の神 (jig ren gyi lha) でもあるタブチラモは強い酒を好むとされ、僧院内はかなり白酒臭くなる。タブチ僧院に民衆から寄進される布施は年額六百万円を超えるといわれ、ラサの大僧院であるセラやデプンをはるかに凌ぐ。

タブチラモとはどういつた神か。伝承によると、もとは中国清代の皇女であったとされる。セラ寺の活仏、二世ケツァン・リンポチエ (ジヤムヤンモンラム) が北京滞在を終えてチベットへ発つた後、普段から姉に虐められていたこの皇女はリンポチエを慕ってラサまでついできたと言われる。その後、タブチ僧院のある土地に住むようになり、ラモ (女神・仙女) として崇められるようになった。タブ



女神タブチラモ

チラモの脚は鶏のそれで、北京の姉によって切断された後に生えてきたものとされる。また、憤怒形で舌を大きく前に突き出しているのは、姉に毒殺をはかられたときに、毒を吐き出すために舌を出したままそのまま固まってしまったのだという。肉体的苦痛や毒を与えたのは姉ではなく、タブチラモの美貌に嫉妬するラサのダキーニー (空行母) だとする説明もあるが、いずれにせよ元来タブチラモは中国から来た美しい貴女で、肉体的苦痛からの奇跡的克服の後、現世の女神として崇められるようになったようである。また、チベット全土および歴代ダライ・ラマの守護神である、女神パンドンラモ (dpal ldan lha mo) の化身のひとつだとする信仰もある。

上記の逸話からは、タブチラモがなぜ商売の神や財神 (nor lha) として崇拝されるようになるのか分からない。チベット仏教のパンテオンには、毘沙門天 (trann thos sras) やザンバラ (dzam bha la) などの財神がいるが、こういった昔ながらの神ではなくなぜタブチラモを崇拝するのであるのか。タブチ僧院の僧侶をはじめ、筆者の恩師で地元チベット文化研究者たちに尋ねてみても、「最近の流行だ」との回答であり、タブチラモを崇拝する多くの地元人もその「流行」に追随するのみで、実態の理解がないまま信仰しているように見える。

ただ、近現代史を少し繙くと、その信仰の背景の片鱗

が見え隠れしてくる。一八世紀の初頭以来、ラサには駐蔵大臣（アンバン）と呼ばれる清朝の役人と兵隊が駐屯することがあった。もとは大昭寺のすぐ北側に駐屯していたが、一七三三年、当時のチベット国王（mi dbang）であったポラワ・ソナム・トブゲルが雍正帝に親書を送り、今のタブチ僧院のある土地にアンバンたちは移動させられることになった。その際、清軍の守護神でもあった関帝を祀る廟がタブチの地に建立されたという。また、毎年夏には関帝祭があり、神輿のように関帝の像を担いでラサ中心街を廻ったといわれる。タブチの「関帝廟」は、今ではなくなっており、いつなくなつたかも定かではないが、「商売の神」としてタブチラモが崇拜される縁起になつた可能性がある。また、チベットの現代化をラディカルに押し進めようとしたことで知られるダライ・ラマ一三世の時代には、興味深いことに、タブチの土地にチベット近代軍の基地（gra bahi dmag sgar）のほか、電気機械工場（gra bahi dlog 'phrul las khungs）が建設された。ここでは水力発電の機械が設置され、ラサの一部の貴族家庭に電気が送られたほか、チベット貨幣の鑄造や軍需品の製造などが行われたという。一九五九年以降になると、タブチ僧院のすぐ裏手は人民解放軍によって主に政治犯を収容する刑務所となり、「ドラブチ刑務所」としてチベットはもろろん世界の人権団体に広く知られるようになる。

このようにタブチ一帯の土地は、時代を超えて「現世力の具現的象徴」として機能してきていることが分かる。軍事的な脅威、経済的豊かさの源泉、そして、反体制の力を押さえ込む巨大な暴力の場として、ラサ人を畏怖させてきた歴史的背景があり、その場所の中心に鎮座するタブチラモ女神が、ラサの都市空間に渦巻く資本主義のエネルギーに呼応するかのよう、カルト的な魅力を発し始めたのは至極自然なことなのかもしれない。土地の記憶に敏感な古い世代のチベット人の意識には、不屈のタブチラモの魂が、その寄るべき肉体を現世に再び得たかのように映っているに違いない。

こういった現世の力と直結しているタブチラモには漢民族の信奉者も多い。噂を聞きつけて、わざわざ中国内地から巡礼に訪れる熱心な信者もいる。地元のチベット人は、タブチラモに参拝に行くのは商人（tshong pa）だけ、それも漢民族（gra rig）ばかり、と言う。しかし実際行つて見ると、大多数はチベット人で、農牧民や四川省などから来たチベット人も少なくない。「金儲けを追求する漢民族とは違い、チベット人はひたむきな信仰に生きている」と現地チベット人はよく誇らしげに語るが、ラサの急速な経済発展の中で広がる格差の中で、本来の信仰のあり方は異なつた意識が大衆レベルで顕わになってきている。仏教はこれからも多くのチベット人にとって重要な指針や倫

理、精神のよりどころとなつていくと思われるが、俗世との相克は以前にも増して鋭くなつてきている。現代化の只中、タブチラモ信仰は、ひとつの「民族の方便」とでも言うべきものであり、この現世の女神は、よりラディカルで危険な方向に向かう信仰^②へ傾かないための、安全なストツパーとしても人々を守護している。

むすびにかえて

——「三・一四」事件と表象されざる

チベット人サバルタン——

以上、現代ラサに見られる格差や民族アイデンティティの問題について、三つの領域から眺めてきた。まず、チベットの現代化について言及し、中国当局の統計データをもとに経済・教育のレベルでの格差を概観・分析することによって、経済的下層に属する多くのチベット人の存在を指摘した。その後、富裕層の形成を見る上で「西藏班」について、そして経済発展の中で流行する現世利益の信仰について、できるだけ多くの現地の情報を提供しながらそれらに考察を加えた。この中で最も伝えなかった点のひとつは、現代のラサには民族内の格差というものが存在し、その中でチベット人アイデンティティと呼ばれているものが、「仏教」や「反漢民族感情」といった、これまでのよ

うな政治性の強い単純なファクターだけでは、もはや捉えられなくなつてきているということである。

資本主義経済を原動力として安定を保持しようとする現代中国は、その急速な経済発展ゆえに社会的な矛盾を抱え込まざるを得ない。チベットは辺境ということもあり、その歪みは一層大きくなる。もともと自分たちの仏教伝統から疎外されてきた歴史があり、その上に今度は経済的に疎外されていく。二重に疎外され、剥奪された貧者は、漢民族の中のチベット族、さらにその中の最下層という相対的な民族経済空間の中で、精神的に追い詰められていく。我々はこの点に、最大級の関心を払わなければならない。

「三・一四」事件を単純にナショナリズムや人権問題などの政治的言説へ収斂させていく危うさと欺瞞。これは、欧米・日本のメディアや人権擁護団体、そして中国当局および官製メディアの、いわば双方の共同作業で、瞬間に強化、完遂された。この収斂の中で置き去りにされていくのは、今回の暴動の主力となつた、または将来起こり得る暴動の予備軍でもある経済的下層のチベット人なのである。政治経済システムから疎外され、また、教育や社会保障、そしてメディアなどの社会認知のシステムからも存在や尊厳を損なわれているこの下層グループは、決して表象されることのない一種のサバルタン^③であると言ってもよい。日本や欧米系のメディアにおいて、抗議行動に参加した僧侶

たちは少なくともその勇氣や企図に対し名譽を与えられたりはしたが、チベット人サバルタンはヘゲモニーに異議申し立てすることはおろか、その存在や生きざる意志を発露する機会さえ根本から奪われている。

問題の解決を切に願う中国当局と外国のチベット支援団体が、皮肉にも結果として、問題の核心である経済的格差に苛まれるこれらチベット人の存在の排除を徹底的に行っている。もつとも当局からしてみると、「経済問題」にするよりも「政治問題」とするほうが、よほど都合という事情もあった。経済格差の問題だと認めれば、火種のある内地の漢民族の間にも飛び火する可能性も考えられたからである。ダライ・ラマ、特に「チベット青年会議」を国家分裂運動の急先鋒とし、ナシヨナリズムを煽ったほうが、オリンピックをひかえていた国内の連帯を強化する上で非常に有効だったのである。一方、欧米・日本のメディアは、「認識の快楽」(pleasure of recognition)を希求する我々の欲望を満たすべく、「共産中国 vs 敬虔なチベット仏教徒」という二〇世紀的で稚拙な政治物語を無批判に再生産した。⁽²⁾

仏教に対する厚い信仰心を持つ一方、驚くべきプラグマティズムを駆使し、これまで生き延びてきたチベット民族。その長い歴史の中において、一三世紀の元朝以来、彼らは外来の列強としたたかに接してきた。だがこの二一世

紀、資本主義システムの徹底化という挑戦を外側から、そして内面からも容赦なく叩きつけられている。外部の人間の勝手な思惑やオリエンタリズム的憧憬をよそに、当のチベット人は身体感覚でそれを実によく熟知している。

「チベット問題」は新しい局面を迎えた。その渦中の中で、チベット人(のアイデンティティ)は何を抛り所にし、どこへ向かっていくのであろうか。世界史上類稀なる精神文明を育んできたチベット民族であるが、新たに浮上してきた「現代性」というエトスに呑み込まれながらも、それを積極的に生きる糧としていく気概や精神性が備わっていると感じるのは、筆者のこの民族に対する、シンパシーを感じるが故の鼻屑目であらうか。

最後に、多大な犠牲を払い続けるチベット人サバルタン、そして「三・一四」を端緒に多くを失ったすべての人々へ祈りを捧げたい。

注

〈1〉「三・一四」事件を伝えた欧米・日本のメディアでは、「抗議行動」と「暴動」とをやや混同して使っていたように思える。本稿では、両者を明確に区別したい。

〈2〉もちろん、インド・ダラムサラのチベット亡命政府や外国のチベット支援団体においては、「チベット問題」が

世界に再び注目されるようになったため、彼らの活動に有利に働いたと思われる。しかし、漢民族との融和を図るダライ・ラマ一四世などの亡命チベット人の穏健派（独立要求は放棄し、中国国内における「高度な自治」を求めるグループ）にとっては、必ずしも歓迎される事件ではなかった。特に、裕福な漢民族の間でチベット仏教文化に対する関心が急速に高まっていたところでの今回の暴動は、中国内地でのチベット仏教理解者をより多く増やしたいと願っていたダライ・ラマ側にとっては、大きな痛手であったと思われる。

〈3〉 そういう意味で、二〇〇一年七月ラサで開催された「西藏和平解放五十周年」の記念式典は、政治重視から経済重視へ政策をシフトさせていく政府の姿勢を内外に知らしめるための、非常に象徴的なイベントであった。この時、北京から招かれた、元チベット自治区書記でもある胡锦涛は、「落伍」から「進歩」へ、「貧窮」から「富裕」へと変貌をとげる「新生チベット」を高らかに謳い上げた（『西蔵日報』二〇〇一年七月二〇日）。

〈4〉 この時期、強硬派で知られた当時のチベット自治区書記陳奎元（一九九二—二〇〇〇）により、教育機関、政府機関および僧院などで反ダライ・キャンペーンが大々的に始まったことはよく知られている。陳の政策に関してはBurnett [2003] の分析を参照されたい。その他、本稿末の参考文献に挙げたTIN (Tibet Information Network) の出版物などにも、陳時代のチベット自治区の政策に関して詳

細な記述・分析がある。

〈5〉 詳細は、拙論 Murakami [2008] などを参照されたい。また、漢民族のチベットに対するオリエンタリズム的視点に関しては、この現象自体が比較的新しいため、詳細な報告や分析は管見の限り皆無である。ここでは、上記の拙論や雲南省のシャングリラ（香格里拉）県の観光ブームを考察した Kolas [2004] に多少触れられていることを指摘しておく。

〈6〉 観光客の数は、『西藏統計年鑑 二〇〇七』や中国統計局のウェブサイト (<http://www.stats.gov.cn>) などを参照した。なお、統計上にみえる観光客数には幾分か誤差があると思われる。この数字には観光客だけでなく「チベットに入境する公共交通機関の利用者すべて」が含まれている可能性があるからである。ただ、観光客数の成長率や観光業の収入等は別計算のため、ほぼ信頼できると思われる。

〈7〉 『西藏統計年鑑 二〇〇七』（三二頁）によると、二〇〇六年における農業人口および非農業人口の比率はそれぞれ八三・六%、一六・四%となっている（ちなみに一九七八年ではそれぞれ八五・五%、一四・五%となっており三〇年近くその割合はほぼ同じとなっている）。また、統計では農業・非農業で分別しており、遊牧民が含まれていないような印象を受けるが、青海省のチベット族などとは違い、チベット自治区の農民は遊牧業を兼業している場合が多く (sa ma 'brug)、統計上では農民の項に含まれていると思われる。したがって、本文では「農民」とは書かずに「農牧

民」とした。

〔8〕『中国統計年鑑二〇〇七』（二二一頁）によれば、チベット自治区で最も一般的な家庭の規模は三〜五人となっている。また、チベットの農牧地域では、小学校に入学する頃から放牧や農作業などを手伝われることが多く、計算上子供も労働人口に加えてもよいと考えられる。

〔9〕 Fischer [2005]。なお、彼が二〇〇六年に筆者に語ったところによると、彼の著作や論文が中国語に翻訳され、自治区政府の担当官僚たちに読まれているようである。自治区政府の経済政策、教育政策を決定する上で参考になっていると思われる。

〔10〕 チベット自治区の経済発展を受け、九〇年代終わりごろから費用の一部を家族が負担することになった。その割合は今ではかなり増えたが、貧困家庭のために銀行の貸付制度や特別給付金などもある。

〔11〕 これらの子供たちの中には、チベット自治区在住の漢民族、特に「援蔵幹部」の子息もごく少数だが含まれている。

〔12〕 本稿で言及する西藏班出身者は、筆者が二〇〇〇年以降個人的交流のあった、さまざまな職業に属するチベット人である。彼らに関する社会的バックグラウンドは倫理的配慮により省かされていた。読者のご理解を乞う。

〔13〕 本稿に出てくるチベット語の単語はすべて、原語の発音にできるだけ近くなるようカタカナ表記した。また、括弧内のアルファベットはチベット語における綴りを表し、国際的に広く採用されているチベット語表記法であるワイ

リー (Wylie) に従った。

〔14〕 中国語では「半蔵半漢」と呼ばれるが、一昔前まで「団結族」と政治的色合いをこめて呼ばれることもあった。

〔15〕 TIN [1999: 11]。TINは財政的な問題のため五年ほど前にその活動を終えたが、その後、TibetInfoNetが中国内のチベットの現状を発信しつづけている。ウェブサイトは、<http://www.tibetinfo.net>。なお、その情報の質や分析の鋭敏性は、残念ながらTINのそれにはるかに劣る。

〔16〕 西藏班出身者など現代チベット人の民族アイデンティティに関する社会人類学的考察に関しては、拙論 Murakami [2006]などを参照されたい。

〔17〕 無論、チベット仏教世界において、現世的な祈願をする習慣はある。病気の平穏や豊作祈願などは農牧民・貴族を問わず一般的であったし、密教やボン教の呪術を用い、相手を陥れて実益を得ようとすることも日常茶飯事であった。しかしながら、本節で紹介する、俗世の利益を祈願する信仰が、職業や貴賤を問わず大衆レベルで急速浸透するのは、ラサの歴史の中でも珍しいと思われる。

〔18〕 タプチラモの縁起について書かれた經典の存在について、タプチ僧院の僧侶から聞いたことがあるが、文革のため失われたとのことである。ここでは民間伝承や在野のチベット人研究者チョンペー (chos phel) によって著されたラサ聖地解説「[gangs can bod kyi gnas bshad lam yig gsar ma las—lha sa khul gyi gnas yig] (二〇〇四)」などを参照した。

〔19〕 例えば、蘇 [二〇〇〇] など。

〈20〉 *dung dkar blo bzang 'phrin las* [dung dkar tshig mdzod chen mo] 中国蔵学出版社出版、二〇〇二年、五五六頁。

〈21〉 同右、五五六頁。

〈22〉 同右、五五六頁。

〈23〉 同右、五五四―五五五頁。

〈24〉 同右、五五四―五五五頁。

〈25〉 ドルジェ・シユグデン (*rdzong rje shugs klan*) 信仰。この

現世の神はゲルグ派の護法神 (*srung ma*) として、十七世紀以降、同派の僧侶を中心に広く崇められてきた。しかし、一九九六年、ダライ・ラマがこの神への崇拜に関して否定的見解を表明して以降（この神に対する自らの信仰を放棄したのは一九七六年と言われる）、チベット亡命社会に亀裂が走っている。この神を崇拜するかどうかでインド・ダラムサラで暴力、殺人事件までがおきており、シユグデンを信奉する一派は、仏教の教えをもとに「調和」や「平和」を世界に訴えるダライ・ラマ側にとって深刻な障害となっている。ラサにおいては、表向きはダライ・ラマの要望にならって、この神に対して否定的な見方がされることが多い。しかしながら、現世においてその利益が比類なく優れていることから、ビジネスで成功をしたいと願うチベット人の間では、タブチラモを越えるカルト的な人気があるのも事実だ。最近この神に関してラサの僧侶の間でも内紛がおきており、これに関しては TibetanInfoNet (<http://www.tibetaninfo.net>) の記事などに少し該当箇所がある。またこの神に関する、歴史的な背景、図像学的な解説など

は Nebesky-Wojkowitz [1993 (1956): 134-145] などを参照された。

〈26〉 一九八〇年代に流行したポストコロニアル・スタディーズの用語。誤解されやすい用語であるが、ここではサブアルタン (*subaltern*) とは、単なる被抑圧民、被差別民ではないことを強調しておく。社会的認知のシステム外に存在する、我々外者にとってみれば、いわば「観念的な」民といえる。彼らは自らを表象する社会的術を剥奪され、また研究者を含む権力者など外部の人間の認知・表象活動によって決して捉えられることはできない、「非存在」の民を指す。本稿におけるこの用語の使用はスピヴァックの意図している定義に近いことを強調しておく。彼女の思想に関しては、Spivak [1990, 1994] などを参照されたい。

〈27〉 暴動の原因を安直に政治問題だけに求めるのではなく、資本主義・市場原理の無理な導入にあるとする、示唆的で、冷静な記事も見られた。例えば、暴動直後にインド人小説家 Pankaj Mishra が *Guardian* (22 March 2008) に寄せたエッセー、"At war with the utopia of modernity" など。『現代思想 総特集―チベット騒乱』(二〇〇八年、八一―三頁) に邦訳あり。

参考文献

〈中国語・チベット語〉

西藏自治区統計局・国家統計局西藏調査総隊編 二〇〇七

- 『西藏統計年鑑 二〇〇七』北京：中國統計出版社。
- 蘇發祥 二〇〇〇 「西藏文化多元性的象徵及其意義」『中國西藏』第六期，五〇—五三頁。
- 蘇發祥 二〇〇五 「扎基寺木扁考釈」『西藏研究』第三期，一〇—一四頁。
- 中華人民共和國國家統計局編 二〇〇七 『中國統計年鑑 二〇〇七』北京：中國統計出版社。
- chos 'phel 1|〇〇四 『gangs can bod kyi gnas bshad lam yig gsar ma las—lha sa khul gyi gnas yig』北京：民族出版社。
- dung dkar blo bzang 'phrin las 1|〇〇1| 『dung dkar tshig mdzod chen mo』北京：中國藏學出版社。
- 〈要語〉
- Barnett, Robert 2003 “Chen Kuiyuan and the Marketisation of Policy,” McKay, Alex ed., *Tibet and Her Neighbours—A History*, London: Edition Hansjörg Mayer.
- Fischer, Andrew 2005 *State Growth and Social Exclusion in Tibet*, NIAS Press.
- Kolås, Åshild 2004 “Tourism and the Making of Place in Shangri-La,” *Tourism Geographies*, Vol. 6 No. 3 August, pp. 262–278.
- Lafitte, Gabriel 2003 “Development, Dependence, Periphery and Accumulation: Aspects of Tibetan and Chinese Economic Thought and Practice,” presented in 10th IATS Oxford.
- Murakami, Daisuke 2006 “National Imaginings, Ethnic Tourism and Contested Tibetan Identities in Contemporary Lhasa, Tibet (PRC)” Ph.D. thesis, School of Oriental and African Studies, University of London.
- Murakami, Daisuke 2008 “Tourism Development and Propaganda in Contemporary Lhasa, Tibet Autonomous Region, China,” Cochrane, Janet ed., *Asian Tourism: Growth and Change*, Elsevier.
- Nebesky-Wojtkowitz, Réne de 1993 [1956] *Oracles and Demons of Tibet: The Cult and Iconography of the Tibetan Protective Deities*, Book Faith India.
- Spivak, Gayatri Chakravorty 1990 Sarah Harasym ed., *The Post-Colonial Critic: Interviews, Strategies, Dialogues—Gayatri Chakravorty Spivak*, London: Routledge.
- Spivak, Gayatri Chakravorty 1994 “Can the Subaltern Speak?” Williams, Patrick and Chrisman, Laura eds., *Colonial Discourse and Post-colonial Theory A Reader*, Pearson Education Limited.
- TIN [Tibet Information Network] 1998–2002 *News Review: Reports of Tibet (1997, 1998, 1999, 2000, 2001)*.
- TIN 1998 *Background Briefing Papers: Political Campaigns (1996–1997)*.
- Wang, Chengzhi and Zhou Quanhou 2003 “Minority Education in China: From State's Preferential Policies to Dislocated Tibetan Schools,” *Educational Studies*, Vol. 29 No. 1.